泌尿紀要17巻2号
1971年2月

泌尿器科紀要

第17巻 第2号

1971年2月

随　　想

泌尿器科学領域における華岡青洲先生とその周辺

山田　肇*

大矢全節先生は華岡青洲をわが国の泌尿器科学の開祖と申してさしつかえないといっておられるので，ここにその当時の医学思想を回顧しつつ青洲先生の偉業を仰いで見たいと考える。

華岡青洲は1760年，すなわち10代将軍徳川家治が9代家重の将軍職をついだ年に紀州那賀郡名手荘の平山村（今の和歌山県那賀郡那賀町あたり）に生れ，1835年11代将軍家齊がつぎの家慶に将軍職をゆずる2年前に同所で歿した．幼名は雲平，長じては通称を隨賢といい，青洲と号した．先祖が河内国の華岡の出であったため，代々華岡姓を名乗った．父，尚道は大阪に出て南蛮流外科医，岩永蓄山に師事して瘍科（今の外科）を修め，帰郷後は内科医を標榜して開業していた．

青洲は1782年，23才のとき上方に出て吉益南涯（東洞の長男）に古医方（主として内科）を，大和見立（富士川游博士は見水と記す）にカスパル流（南蛮流またはオランダ流ともいう）の外科を学んで26才のとき帰郷し，父のあとをついだ．

青洲をとりまく当時の医学思想はどのようであったか．わが国の医学が中国からの伝承にもとづいていたからには，当然わが国の医学思想にはそのレプリカがあった．中国の医学が自然科学的方法論の緒についたのは，後漢時代（25～220 AC）の張仲景の傷寒雑病論このかたであるといわれる．そのご，隋（589～617），唐（618～907）となるにつれ，道教，仏教の影響がしだいに強く反映するに至って迷信的要素が加味され，さらに宋(960～1120）時代からは儒教の発展にともない，医学はその哲学的背景のもとに前時代とは著しく変ってきた．金（1126～1276），元（1279～1366）時代になると，張仲景の精神に帰れという反省の声も出てきたが，大勢はゆるがず，ついに清（1662～1911）時代に至って西洋医学に直接触れることになる．

わが国では1543年に種子島に鉄砲が伝えられ，ついでザビエルが1549年に来日するに至るまでは，ほとんど中国医学一辺倒であった．ところがアルメイダが1555年に来日するとともに，いわゆる南蛮医学が伝えられたのであるが，戦国動乱につづいて徳川幕府の鎖国政策のためその発展ははかどらず，8代将軍吉宗の時代に至ってようやく長崎の出島を通じて，蘭学，ひいてはオランダ医学が発展の軌道にのるのである．その間に，家康以来，官学となってきた宋学，すなわち朱子学に対し，伊藤仁齊（1627～1705）の反発があり，かれの「孔孟の昔に帰えれ」との呼びかけに呼応して，医学領域においても名古屋玄医（1628～1696）が出て「張仲景の昔に帰れ」と呼びかけ，ここに青洲の時代には，宋より明におよぶ中国後世医学を奉ずる後世家，これに反発する名古屋玄医，香川修徳（1682～1754），吉益東洞（1702～1773）一派の古方家，さらに新しいオランダ医学を奉ずる一派が三つどもえのかまえを見せていたのである．

青洲は冒頭でのべたように，古方家，吉益東洞の長男南涯に古医方（とくに内科）を，オランダ流外科を大和見立に学んだのであるから，自然科学的精神に立脚した漢蘭折衷派

* 京都大学医学部教授（薬理学）

の１人というべきである．医学史では山脇東洋（1705～1762）を以て漢蘭折衷派の祖と見なしているが，その東洋の歿する２年前に青洲が生まれたのである．したがって青洲の壮年期には漢蘭折衷派の地歩もようやく固まり，青洲が広い視野に立って一党一派に偏せず，「内外合一，活物窮理」を主張したのは当然の帰結である．そのことばの意味は，内外とは国の内外ともとれるし，内科外科の意味にもとれるが，要するに必要な学問技術は区別なくこれを吸収し，実際の人体の生理，解剖をよく明らかにしてはじめて疾病の治療ができるのだということのようである．それについて，こんなエピソードがある．

青洲はよく導尿カテーテルを用いたが，それは幅約 1.5 mm の銀板をラセン状に巻いて中空にしてあり，屈伸自在で，長さ約 30 cm，その内部に同じく銀製のマンドリンを納めたものであった．しかし門弟たちにはその挿入がなかなかむずかしいので，ある日10名ばかり集まって青洲にその使用法をたずねたところ，青洲は「実物を自分が実際に挿入するところを見せねば，その方法を教えることはできないから，お前たちの中で誰か１人ペニスを出せ」という．門弟たちはみなしりごみしてお互いにゆずり合ってなかなか決まりかねたが，やがて石川甫淳という者が自分のペニスを犠牲に供し，青洲の妙技をはじめて知りえたという．まさに活物窮理である．

しかし華岡流外科の最大の武器は，通仙散と称する麻酔薬を用いたことである．それは後漢の名医，華陀より伝わるといわれるが，中国で実際に使用された記録はない．わが国では青洲以前に整骨科の領域で使用されたが，それも鎮痛の目的のためにすぎなかった．青洲が通仙散を内服させて最初に全身麻酔をおこなったのは1805年10月13日である．和泉国の60才の婦人に試み手術は成功した．エーテル麻酔のロング（1842）に先立つこと38年，クロロホルム麻酔のシンプソン（1847）に先立つこと43年のことである．青洲は常に門下生にさとすのに，「人の治療し得ないものを治療するように心がけ，治療しうるものを治療しえないことを一生の恥と心得よ」といった．その意気で青洲は乳ガンをはじめ，鎖肛，鎖陰，尿道結石，痔瘻，脱疽，兎唇，包茎，陰茎ガン，尿道狭窄の拡張，膀胱穿刺，陰のう水腫など外科，泌尿器科領域の多彩な分野を開拓した．開拓精神は必然的に独創力を生んだ．たとえば陰のう内腫瘍の患者でどれが睾丸でどれが腫瘍かなかなかわからないことがあった．青洲はメスを取り，手術をする身がまえをしいきなり大声で患者に「お前は若いとき不行跡をしたから梅毒となりこのありさまになったのだ．身から出たさびとはこのことだ．一思いに睾丸を全部切り取ってしまうから覚悟せよ」といって，そのメスを患者の股間にかまえたので，患者は仰天し顔面蒼白となった．青洲このとき少しも騒がずおもむろに陰のうをさぐり，縮み上がらない部分だけを摘出したという．

また25才の婦人で淋疾が原因で，尿道と膣壁との間に瘻孔を生じた者に対し，瘻孔縫合後，尿道中に鶴の羽を入れて留置カテーテルの代用とし，みごとに創口を治癒せしめたというが，いずれも独創性の現われである．

青洲の名声は今や日本中に広まり，その家塾に入門した門弟は前後 1,300 人に達し，六十余州のうち門弟を出さなかったのはわずかに大隅と壱岐の２国にすぎなかったという．

1819年紀州藩公は青洲（ときに60才）を藩医に任じたが，青洲はそのために和歌山に移ると一般の人びとの治療ができなくなるからという理由でことわった．しかし藩公異例の取計いで，平山村にとどまることを許され，いわゆる「勝手勤め」の身となった．

青洲のおこなった乳ガンの手術は百数十例におよび，かれの門弟，本間棗軒（1804～1876）を除いては，かかる手術の大家は明治に至るまでついに出現しなかった．

その名声のかげにかくされた青洲の家族の物語は有吉佐和子氏の名著で浮彫りにされている．（1971．1.28）

文　　献

1）小泉栄次郎：日本漢方医薬変遷史，南江堂，東京，1934.
2）大矢全節：世界泌尿器科学史，皮膚科泌尿器科学大系（泌尿器科学），第１巻，第１冊，南江堂，東京，1938.
3）富士川游：日本医学史，日新書院，東京，1941.
4）太田正雄：日本の医学，民風社，東京，1946.
5）刈米達夫：生薬学，広川書店，東京，1949.
6）第16回日本医学会総会講演要旨，大阪，非売品，1963.
7）小川鼎三：医学の歴史，中公新書 No. 39，中央公論社，東京，1964.
8）有吉佐和子：華岡青州の妻，新潮文庫，草132F，新潮社，東京，1970.